

緩和ケアの ちょっと タメになる話

Vol.13

第13回のテーマはこちら

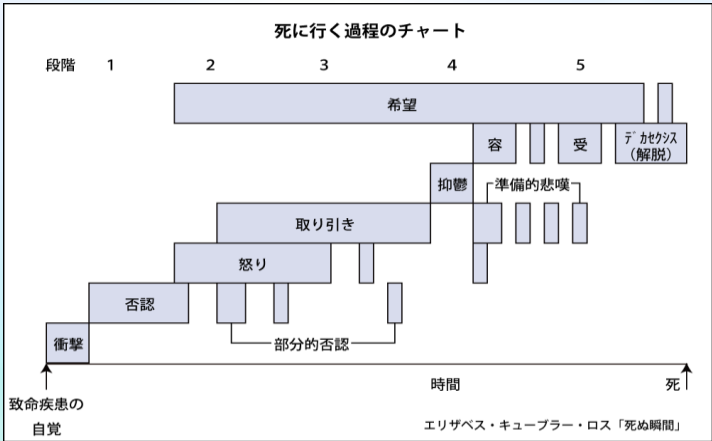
「希望はどんなときでも存在する」

～死の受容過程を見返そう～

終末期看護をしていると時々こんな言葉を聞くことがあります。
 「現実離れた希望を持っている」「もっと現実を見て理解してもらわないと」などなど。
 このような言葉は『希望を持つこと＝現状を理解していない』と認識してしまっているために
 出てくる言葉なのではないかと思えます。
 では実際に“死に向かう過程の中で希望を持つこと”は“理解力のなさ”と言えるのでしょうか。

国試でも覚えたであろうキューブラー・ロスの「死の受容過程」をあらためて見返してみたいと思います。
 おそらく多くの人たちは死の受容過程を「否認→怒り→取引→抑うつ→受容」の並び順で記憶したのではない
 でしょうか？自分も語呂合わせを駆使して順番とそれぞれの内容を覚えました。

しかし右の図をあらためて見返すと先ほどの並び順のほか、一番上に「希望」という言葉が死の瞬間まで続いていることに気づくと思います。
 つまり“希望はどんな時でも存在する”ということが言えます。このことから『希望を持つこと＝現状を理解していない』という認識は成り立たないことがわかります。



ただ問題はここからです。

『希望を持つこと＝現状を理解していない』と決めつけることはできませんが、実際に不十分な理解のために希望を持っているケースもあります。“理解した上での希望”か“理解してないがゆえの希望”かを丁寧に確認しながら、個々のケースで対応を検討していく必要があります。

希望というのはどんな人にとっても“生きる力”になります。
 患者・家族から希望の表出があった際はどんな状況であってもしっかり受け止めて
 その後の生活援助につなげられるようにできればいいなというお話でした。

腹黒ナースマン